広島広域都市圏地域貢献人材育成支援事業報告書

避難を伴う災害時に子どもが抱える課題と必要な支援を明らかにする活動

広島文化学園大学学芸学部子ども学科｜

研究代表者：伊藤　駿

目次

はじめに *2*

調査の結果 *3*

1. 市町村 A 3
2. 市町村 B 4
3. 市町村 C 4
4. 市町村 D 5
5. 市町村 E 6
6. 市町村 F 7
7. 市町村 G 7

学生の感想 *9*

はじめに

本報告書は 2022 年度「広島広域都市圏地域貢献人材育成支援事業」に採択された「避難を伴う災害時に子どもが抱える課題と必要な支援を明らかにする活動」において得られた成果をまとめたものである。

当初は広域都市圏を構成する全市町村へ訪問する予定であったが、新型コロナウィルスの流行はもちろんさまざまな理由により訪問できた市町村は 11 箇所（うち、1 箇所は書面での回答）であった。全市町村へ訪問できなかったことは残念である一方、聞き取りを快く受け入れてくださった市町村の皆様へ御礼申し上げたい。また本報告書においては、紙幅の都合上、上記の中でも 7 箇所の調査報告を行なっている。

本調査活動は広島文化学園大学学芸学部子ども学科の伊藤ゼミが中心となって行った。本学では 2021 年度の新型コロナウィルスの流行下に起こった佐賀県武雄市およびその周辺地域の豪雨災害に対して「遠隔ボランティア」を講じたり、2022 年度からは「防災・災害支援プロジェクト」を発足させたりするなど、安心・安全なまちづくりに寄与するための取り組みを進めてきた。

そうした中、災害時には子どもたちがより不利な立場に置かれやすいということに思い至り、子ども学科の学生として災害時の子どもたちの人権保障に向けてできることを検討していくこととなった。その取り組みの 1 年目として今回は市区町村において災害時に子どもに対してどのような支援を想定しているのかを明らかにすることを本研究では目指している。

調査の結果は後述の通りであるが、各市町村ではそれぞれの地域特性を鑑み優先順位をつけながら災害対策が実施されていた。しかし、子ども支援という点ではその優先順位が十分に認識され、子どもたちの教育を受ける権利を災害時でも保障することの必要性が明示されている市町村もあれば、そうした支援は想定されていないという回答もあった。こうした結果を踏まえ、私たちもどのような貢献ができるのかを引き続き検討をしていきたい。

最後になるが、本調査の実施を通して各市町村における災害時の子ども支援の充実が図られること、また調査に参加した学生たちが将来それぞれの現場で子どもたちの権利保障のために尽力してくれることを願っている。

研究代表者
広島文化学園大学
伊藤　駿

調査の結果

以下では、それぞれの市町村での聞き取り結果をまとめたものを報告する。なお、市町村名は匿名としている。また、それぞれの地域で想定している災害については、記載されていない災害を全く想定していないということを意味しないことには注意を要する。それぞれの部署において、対策の焦点となっている災害という意味である。

1. 市町村 A

想定している災害

- 豪雨
- 土砂災害
- 南海トラフ巨大地震

災害時の子ども支援の想定

- 子どものケア
- 子どもの預かり

上記の想定に対する具体的な対策

- 防災訓練
- 地域防災計画
- ハザードマップ（紙媒体）※ウェブ版作成中
- 防災講座（小学校、高齢者サロン）
- 地元企業等との連携協定（一時避難所、防災企画の開催、物資・人的支援とその援助、燃料確保、防災等の情報提供、防災教育・グッズの提供）
- 物資の備蓄（食料、生活物資）→小・中学校（備蓄倉庫建設）、備蓄倉庫
- 幼稚園、保育園で子どもの預かりに対応
- 福祉避難所の拡充、要支援者への対応→今後の課題
- 避難所のケアスタッフ→ケアマネ、社会福祉協議会、ボランティア、元看護師、シルバーセンター等の協力依頼
- 保健師が避難所を巡回
- 大学との連携協定→ドローンを活用した被災状況等の情報提供
- 個別支援計画、要支援者名簿等の作成→消防団、警察等に情報提供し避難の呼びかけ等に活用
- 幼稚園、保育園で避難計画作成、訓練実施

2. 市町村 B

想定している災害

- 土砂災害
- 洪水、津波
- 地震

災害時の子ども支援の想定

- 応急教育の実施
- 心身のケア
- 部活動の機会保障

上記の想定に対する具体的な対策

- ハザードマップ（土砂災害、洪水・津波、ため池）
- 断層ごとの被害予想（HP）
- 地域防災計画（企業等との連携協定）
- 授業時数の確保（通常時数より増やして補修）
- スクールカウンセラーの派遣
- 被災により部活動の再開が遅れた地区はシードで大会出場といった特別措置
- 児童、生徒の安全確保（教員による通学路の確認、家庭訪問、電話・メール連絡）

3. 市町村 C

想定している災害

- 大雨
- 土砂災害
- 地震
- 洪水

災害時の子ども支援の想定

- 乳幼児用品の備蓄→避難所と市で連携を取り必要箇所に提供
- 学習支援（GIGA スクール構想による端末の利用も想定）
- メンタルケア→スクールカウンセラー、「心を元気に育てる体験活動」
- 避難所の視察→対応
- 特別支援学級に通う児童、生徒の情報共有

上記の想定に対する具体的な対策

- 大雨注意報が出た時点で 2 名待機→状況により増員

- ハザードマップの作成（紙・ウェブ）、事前に家族での話し合いを促す記載
- 避難所への物資備蓄（水、食料、エアマット、発電機、仕切り、ミルク、オムツ、哺乳瓶など）
- 自主防災組織による避難訓練、町歩きをしながら危険個所の確認
- 広報冊子での情報発信
- 学校での防災教育（土砂等の対応携帯マニュアルの作成、携行指導、朝会等折に触れて話題にする）
- 障害者等の個別避難計画の作成
- 避難所と連携し状況を把握できるよう体制作り
- タブレットを使用しての学習課題送付、オンライン面談
- スクールカウンセラー等の派遣、面談、教員への研修
- 被災地の子どもたちが楽しめるような行事等の実施（マリンスポーツ体験、レクリエーション、マジックショー、スキー体験など）
- 企業との連携（物資、機材の提供）
- 大学との避難所協定

4. 市町村 D

想定している災害

- 洪水

災害時の子ども支援の想定

- 学習支援
- 保育の環境整備
- 子どもへの避難所運営の役割付与
- 遊びスペースの確保
- 夜間学習室
- 心のケア

上記の想定に対する具体的な対策

- 避難訓練
- ハザードマップ（浸水、土砂災害、避難所）※ウェブ版
- 避難所内の物資（食糧（アルファ化米、ビスケット、液体ミルク、粉ミルク）、飲料水、生活用品（毛布、哺乳瓶、生理用品、おむつ（大人用、子ども用）、マスク、トイレットペーパー）、資機材（簡易ベッド（組み立て式、段ボール式）、発電機、投光器、コードリール、簡易間仕切り、テレビ、ラジオ、ワンタッチパーテーション））
- スクールカウンセラーによる心身のケア

- 教育委員会関係機関によるケア
- 地域の防災士による防災教育、高校独自の防災教育
- 防災士になるための補助金
- 避難所マニュアルの作成
- 指定福祉避難所、浸水時緊急対応施設、広域避難場所
- 住民に対する備蓄品準備のお願い
- 災害支援の協定締結
- 備蓄計画の作成
- 情報提供（広報誌、音声告知放送）

5. 市町村 E

想定している災害

- 豪雨災害（土砂、河川氾濫、床上浸水）
- 南海トラフ

災害時の子ども支援の想定

- 早期避難
- 教科書、学用品等の支給
- 休校中の学習支援
- 避難後のケア

上記の想定に対する具体的な対策

- 防災、避難情報の配信（防災行政無線、住民メール、ニュースアプリ、LINE）
- 備蓄（非常食、災害用ミルク※現在はなし、飲料水）
- 災害応急計画
- ハザードマップ（洪水、土砂災害、津波、高潮、地震）※ウェブ版
- 地域防災計画の策定
- 安全なうちに避難できるよう早期警戒体制（早期開設避難場所）
- ICT（タブレット）での学習支援
- スクールカウンセラー等を派遣し心のケア
- 災害支援に関する連携協定等（団体、企業、自治体、医師会（医療、助産）、避難所となる学校、防災資機材・食料品の協力）
- 自主防災組織、自治会、地域住民との平時からの防災講和、防災訓練

6. 市町村 F

想定している災害

- 豪雨
- 台風
- 南海トラフ大地震

災害時の子ども支援の想定

- 福祉避難所
- 心のケア
- 休校期間中の学習支援

上記の想定に対する具体的な対策

- 自衛隊、警察、消防、各種インフラを巻き込んでの災害訓練
- 地域防災計画の策定
- 物資の備蓄（食料、飲料水、マンホールトイレ、間仕切り、段ボールベッド、粉ミルク、哺乳瓶、おんぶひも）
  ※下線＝福祉避難所のみ
- ハザードマップ（津波高潮、土砂災害）の作成
- スクールカウンセラー等によるカウンセリング（体操、ゲーム、アンケート）
- 学校を開放し子どもの一時預かり
- 教員による学習支援
- 災害支援を行う団体との連携協定（県、市町村、民間企業（建設機械、トラック、避難場所、テレビ局））

7. 市町村 G

想定している災害

（箇条書き）

- 台風
- 豪雨
- 豪雪
- 大規模火災
- ガス、危険物の爆発

災害時の子ども支援の想定

- 教育機会の確保

- 応急教育
- 教育備品の被害調査、復旧措置
- 被災学校の保健衛生
- 教職員の動員
- 子どもたちのケア
- 障害児の避難

上記の想定に対する具体的な対策

- 土砂災害のハザードマップをもとにワークショップを開催
- 地震防災マップ
- 浸水ハザードマップ
- 迅速な避難所開設のために平時から担当人員割り当て
- 物資の備蓄（食料品（クラッカー、水、粉ミルク、液体ミルク、使い捨て哺乳瓶)、生活用品（毛布、段ボールベッド、エアマット、簡易トイレ、生理用品、非接触型体温計、マスク、簡易間仕切り、弾性ストッキング、ラジオ、発電機、投光器、ペットゲージ、冷風機)）
- 学校の早期再開を想定した避難所レイアウト
- 生徒へ無償で教科書給与（災害救助法適用地域の場合）
- スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、学校医、保健師による個別対応
- オンライン、別の学校への協力依頼等を行い学習支援
- 特別支援学校の児童のための避難所開設
- 災害支援の連携協定（避難所、物資の供給、道路・公共施設の応急措置、災害情報等）
- 地域防災計画の作成
- 協定団体との防災訓練
- 専門家への支援依頼

学生の感想

1.　学生 A

今回私はインタビューを通して、各地域内で問題視されている自然災害の想定やその災害に対する対応、また地域に住まわれる方々への配慮について学ぶことができました。避難準備、避難の際の情報公開の方法や媒体、そして私たちの焦点である子どもたちへの学習支援やミルクなどの物資について共通の悩みや思いがある事も学ぶことができたと考えています。質問をさせて頂く際、単に質問をするのではなく、話の流れを踏まえながら、より掘り下げていくことの難しさを感じました。また、事前に質問内容を考え、準備をした状態でインタビューに伺ったとしても、その場の流れや質問内容の伝え方によって順番を臨機応変に変更したり、伺い方を変えたりするなど、ただあるものだけで質問を行うのではなくそこからどのように繋げるのかということについても難しさを感じました。

私は多くの地域へ伺わせていただくことができ、各地域の災害想定や地域性に合わせた支援の方法や手段、物資の内容の違いもあること地域性についても知ることができました。今回経験させて頂いたことを元に、これから先の防災教育や子どもたちとの交流の場で何が大切になるのか地域によって生活している人たちへの安心･安全を作り出すための知識を深めていき、実際に災害が起きた際にどのように動くことが必要なのかその後自分自身に何をすることができ、地域に貢献することが出来るのかなど就職をした後にも学び続け生活の中に取り入れて行きたいと思います。

2.　学生 B

今回のインタビューを通して、災害について何を想定しての訓練なのかとか災害時に子どもが抱える課題についてなどが分かりました。

災害についてこれまで自分は何も分からない素人でしたが、多くの方にお話を聞きに行く中で少しずつ災害そのものについても学ぶことができたと思います。当然のことながら地域によって説明される内容は共通する点も違う点もあり、それぞれの地域特性を踏まえて考えることの大切さを知ることができました。

私は自身の性格からもなかなか質問をすることができませんでしたが、同じく調査にいったメンバーの質問を踏まえて掘り下げていくことの大切さを学びました。

今後は今回学んだ内容をできるだけ多くの人に伝えていけるようになりたいと思いました。

3.　学生 C

私は今回の活動を通して災害や防災教育について改めて深く考える機会になったと思いました。

私は平成 30 年 7 月の豪雨災害のときに、生まれ育った地域で土石流、川の氾濫、道路冠

水がおこりました。土石流により三年間をすごし卒業した中学校、普段バスで通る道、いろいろなものが泥だらけになりました。亡くなった方もいて、友人が知り合いだと言っていました。その経験があり、災害については人より関心も高いと考えていました。しかし、災害から数年がたち、災害から復興し、きれいになった道が当たり前の景色になったこともあり、災害に対する恐怖も薄れてきていました。今回の活動を通して自分の住んでいる地域で何が起きたかを改めて思い出す機会になりました。また、災害がおきた地域の人ではなくても、自分の地域で起きるかもしれない災害について知り、対策してほしいと強く思いました。

今回の活動で私たちは主に、災害対策、災害教育についてインタビュー調査しました。そこで、子どもにどれだけの支援が行われるかという現状を知ることができました。多くの地域では、粉ミルクまたは液体ミルクやおむつなどの乳幼児向けの対策はなされている一方で、小学生以上の子どもに向けた対策があまりなされていないということが分かりました。また、自分たちも今後この調査結果を踏まえて、アイデア提案などを行っていきたいと思います。

今回の活動を通して自分の経験を思い起こすことができました。また、子どもたちへの災害対策の支援が充実すればいいなと思う新しい考えができる機会になりました。